杉活用した集成材でE120

藤寿産業

強度と価格競争力でメリット

藤寿産業（福島県郡山市、蔭山寿一社長）は、杉とロシア産ダフリカカラ松の異樹種混合集成材で中・大断面のJAS認定を取得した。11月5日付。杉を活用しながらE120を安定して得られるメリットを生かして、物件に応じて顧客に提案していく。

杉・ダフリカカラ松の集成材

この集成材は外層部にロシア産ダフリカカラ松、中層に杉を使っている。外層部のロシア産ダフリカカラ松で強度を確保しながら、横架材での杉利用の拡大と高強度集成材のコスト削減を図っている。同社では国産カラ松や米松などと杉を組み合わせた集成材も製造できるが、E120の強度を安定して出すことができるという量産性の観点からロシア産ダフリカカラ松を採用した。ロシア産ダフリカカラ松のラミナはロシアからコンテナで輸入している。また、全層ダフリカカラ松集成材でもJAS認定を取得しており、E135を出すことができる。

同社では中大規模木造の需要拡大と多様な物件への対応力強化に向けて部材開発に積極的に取り組んでおり、これまでも耐火集成材やプレストレス集成材など様々な製品を開発している。

また、製造・加工能力の拡充も進めている。大断面集成材製造用の2次接着メガプレスラインの長さを16㍍から26㍍に10㍍延長する工事と、今年1月に導入したフンデガーの特殊加工機「ロボットドライブ」を1基追加で増設する工事が進んでいる。11月末から12月初めにかけて完了する。

同社ではコロナ禍の影響を大きく受けることなく、年間を通じて忙しい状態が続いている。加工機械はいずれもフル稼働で、新設・増設が進んでいる設備も準備が完了次第フル稼働体制に入る予定が立っているほどだ。今年は民間物件の比率が高く、その内容もこれまでもあった教育施設や老人福祉施設だけでなく、運動場や企業の店舗など幅広い。こうした、多様な物件に対応可能で、強度や価格、国産材利用の拡大といった顧客のニーズに見合った部材の開発に今後も取り組んでいく。